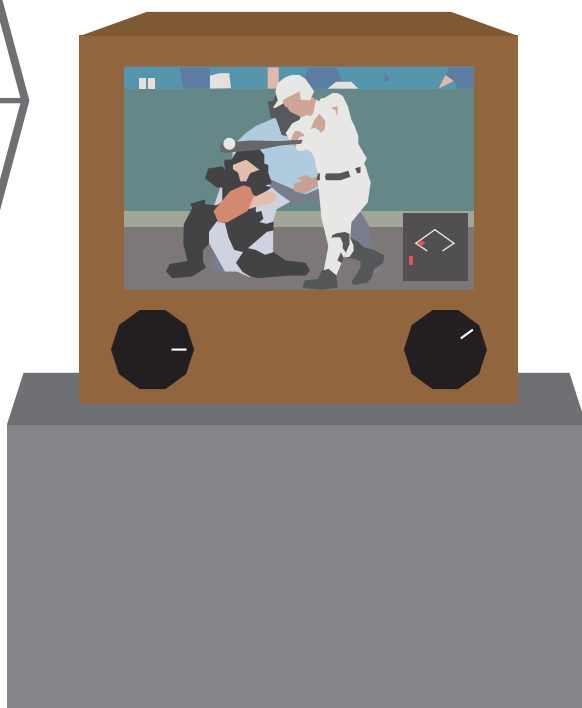
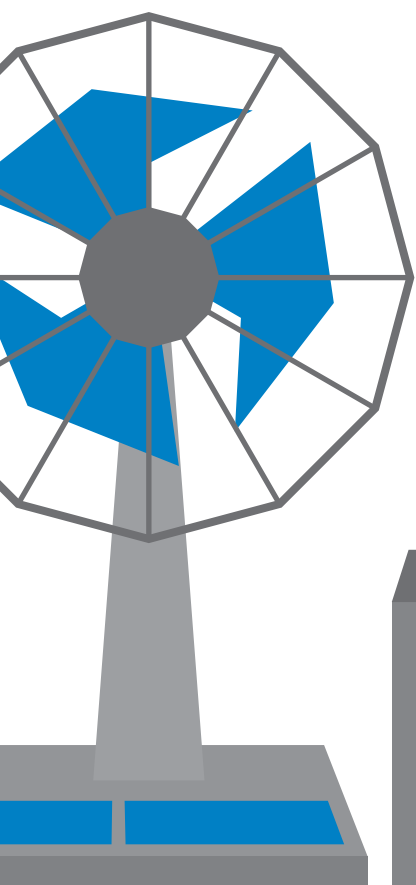


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2023年8月 NO.232



[もくじ]

- 2〜3 不思議にへんてこな詩の展示と朗読…諸井 朗
- 4〜5 競走から共創へ「馬と共に生きる」…宮崎栄美
- 6〜7 チェコスロバキアとの出会いがオペラ高知公演に…関川恵子
- 8〜9 みんなが絶賛している本をいまさら読んでみたけれど…山中由貴
- 10 かるぽーとご近所探訪
- 11 「アンテナ」全身プロテクターの健太君…下尾 仁
- 12〜13 高知市文化振興事業団5〜7月の事業から
- 14〜15 風俗歳時記・風伯

不思議にへんてこな詩の 展示と朗読

諸井 朗

詩を読み始めて60年、書き始めて50年ほどになる。中原中也から始めて、谷川俊太郎、田村隆一、天沢退二郎、北川透、鈴木志郎康、最後に入沢康夫にたどり着いたのが40年前。それ以降は本業が多忙で、現代詩は横目で見ながら、自作を書きためていた。妻の仕事（言語障害臨床）の関係で高知に縁ができた。街を探索するうちに、片岡文雄、田村伸一郎といった詩人達の作品を発見した。これも40年前のこと。

大学の改組に関わって30年ほど前に当地に定住することとなった。本業は、日・独・英語などにおける言語相互行為の比較対照、および異言語・異文化間相互行為研究。飲食生態論を関連領域とし、フィールドは中欧ドイツ語圏である。修行時代には英・独語の詩を大量に読まれた（トマス、リルケ、ツェランなど）。異言語・異文化体験を通じて見えてくる詩の諸相とその中の様々な差異にも興味を抱いた。

定年退職の年に、それまでの作品から選んで私家版の詩集にまとめた。10年前のことである。その後4点の原著？詩集を出版した。面白がってくれる人がいるだけで満足であるが、いっそう面白がってもらうために朗読会を催してきた。2022年12月で10回となった。聴く人の表情を間近に見る小さな会である。畏友宇和川耕一氏に自作の歌を披露するよう依頼した。諸井自身のBGM（バックグラウンド曲）も披露した。

さらに書やプリントの展示と朗読を組み合わせ、詩のインスタレーションとも言える試みを行った。拙著の編集者国光ゆかり氏の紹介で、展示デザインの専門家である里見和彦氏の協力を得

た。展示した作品をその場で朗読した。この線上で楠瀬葉子氏の彫塑作品とそれにヒントを得た詩作品を展示した。それらを背景に諸井の朗読と宇和川氏の歌を披露した。楠瀬氏には最新刊の挿絵を提供していただいた。その原画を併せて展示した。

さて、書かれたテキストを音声言語化（朗読）することは、眼と耳のイメージに充ちた読解・聴解の過程を惹起する。参加者の心身に一定の認知状態を形成し、これを共有するという楽しみは、視覚的展示に劣らず、作品受容という行為の公共化に資する。公共化とは大げさだが、要するに皆で同じ（と見なしうる）体験を共有する仕組みと開かれた場を構えることである。これは孤独な現代詩青年の孤独な追究から帰結した方策である。発話、思考、知識などおおよそ言葉（記号）に関わることは、相互行為を通じてソキエタス（人の集団、社会・共同態）に関わることである。前世紀の末から広く承認されるようになった言語相互行為観でもある（制度による言語の道具化・武器化の認識と平行して）。

日本語や英語など個別言語の発話に固有の「リズム」と「メロディー」が知られており、これを用語でプロソディという。狭い意味での朗読は、音声的変化の乏しい類で、各言語の日常発話のプロソディが暗黙の前提となる。その基礎には各言語の（文法）構造がある。例えば日本語「しんかんせん」は6つのリズム単位で発話されるが、shinkansenと表記し英語などの話者に発話させると、3つの音節に基づく3つのリズム単位として実行される。英・独語などの発話では、リズム

単位間の優劣（強弱）に応じて、単位の圧縮・拡大・包摂が起こる。「アイゲットユウ」（7単位）の原形であるらしい英語の発話表現（の一つ）を「耳コピー」すれば、「ァゲチュ」（xXx：3単位）となる。言語固有のプロソディは日常発話の通常性（当たり前）の基礎である。

広い意味での朗読には朗誦も加わる。音声表現の実演に際して、慣習的な（祝詞風、講談風など）あるいは独自の図式が適用される。吟誦とも言える。さらに一定の条件を充たして旋律として認知される場合は歌唱であり、なかば音楽の領域に入る。以上を広義の朗読とする。諸井自身は、とくに中原中也作品において、明瞭な聴覚像（朗誦ポテンシャル）を感知し、実行した経験がある。今でも暗唱で朗誦や歌唱のできる作品がある（「曇天」「六月の雨」など）。その潜勢力を顕在化する

には、パブリックな（公共化された）生活形式としての朗読会は好適な枠組である。

ある朗読会の参加者が「不思議にへんてこりん」という感想を述べた。朗読会シリーズは「音とこととよじれる意味」と名付けてある。音声表現は今ここにはない事を提示し、同時に今この出来事であり、両者を一体として捉えようすると、意味がよじれて不思議にへんてこりんが出現する。で、詩の主題とは何か。ヒトが人として働きかけ合い共同態を作り維持すること、その中で私（達）が私（達）であること全般である。私は共同態での相互行為を通じて（自他に）そのような者として認知されてきた私であり、その過程は至福と焦燥に充ちている。違和、怒り、透察、和解の無言劇を言葉が演じる。

<出版・朗読・展示の歩み>

- 2013年3月：私家版『音声詩篇集成』刊（南の風社、以下版元全て同じ）
2018年2月：『詩集わかれあう』刊、朗読1（いの町内カフェー）
10月：朗読2（高知市はりまや町カフェーバー）
12月：朗読3（高知市朝倉在カフェー）
2019年5月：朗読4＋宇和川耕一氏歌（同上）
8月：『博物詩』刊（里見和彦氏装丁・デザイン）
9月：朗読5（高知市朝倉在カフェー）
2020年2月：書・プリント展示（里見和彦氏監修）、
朗読6（高知市入明在ギャラリー）
2021年1月：『詩集ほぼ抒情詩』刊、朗読7と自作曲紹介（高知市朝倉在カフェー）
11月：朗読8と自作曲紹介（高知市入明在ギャラリー）
2022年3月：『詩集じこのたんきゅう』刊（楠瀬葉子氏挿絵）
6月：朗読9、宇和川耕一氏歌
（高知市朝倉在カフェー）
12月：朗読10、宇和川耕一氏歌、
書・プリントと楠瀬葉子氏作品展
（高知市升形在ギャラリー）



2020年2月展示・朗読会
（高知市入明「おうちスペースi」）



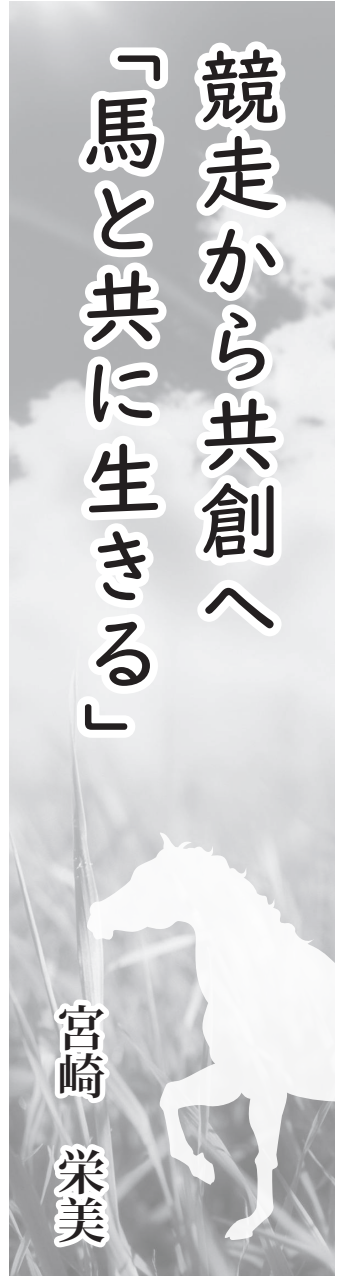
楠瀬葉子作「暮れ六つ時」
（画像制作者提供）

もろい ろう

1950年大分市生まれ、転勤族。本名は丸井一郎、筆名は元来作曲用に考案。音声（音響）表現の出現は明け方目覚め時が多い。コンピュータ利用（sibelius / dorico）の作曲を愛好。

競走から共創へ 「馬と共に生きる」

宮崎 栄美



この牧場を開業してから今年で十二年目を迎えている。

目を閉じて、あの日の光景をここにつれて来る。どしゃ降りの雨の中、一匹の野良犬が走っている。急ぎ足で行くあてもなく雨をよけ走り続ける犬。私はそれを暖かい車の助手席から眺めている。寒い雨、空腹を満たすあてもなくただ走る犬。車から飛び出して犬を抱き上げ、乾いたタオルで身体をふく。彼の目から安堵の表情と不安の表情が表れ、私は話しかける。優しく頭をなでて：もう大丈夫だよ…。

目を閉じた思考の中でその犬を助ける。閉じた目を開き、雨に打たれて姿が見えなくなった犬の行方を目で探す。恵まれた結婚生活の中で不自由を感じたこともなく、好きな時に旅行に出かけ、欲しい

ものを買い、自分の時間を楽しんでいる私に、この犬一匹を助ける心の余裕が無いことに今更ながら驚き、戸惑った。私の心に自然と湧き上がる美しい感情を、いつも自ら打ち消していることに気づいた。

本当の自分は何処にいいのか。湧き上がる思いを無視し、真実の感情に蓋をして小さな心の箱に閉じ込める。そんな自分の生活は本当に幸せで、豊かで、調和がとれていると言えるのか？ 牧場を開業する五十三歳の寒い朝、本当の自分探しに気づいた瞬間でもあった。

一人の時間を楽しむことが好きな私はその日、リビングでお茶を飲んでいた。庭にある沈丁花の香りがかすかに漂ってくる。目を閉じてお茶の香りと沈丁花の香りを

楽しむ。ふと、動物病院にあった馬の絵画を思い出した。躍動する馬の群れ、砂煙と嘶きが聞こえてくるようなその絵を思い出した瞬間、「私の残りの人生で、この美しい動物のために何かをやらなければ：」漠然とした曖昧さの中で、しかし私は確かな自分の決心を感じていた。

家族、友達、知人すべての人が私の牧場開業に反対した。すべての関係者たちが皆口をそろえて、その夢が実現できない理由を語った。しかし、私の心は叫んでいた。実現できない理由を並べるのではなく、どうすれば実現に向かうことができるのか！ なぜ人は自分の夢の前にある大きな山を見ると、できない理由ばかり並べるのか…。そう思うのと同時に、今までの私の人生もまた皆と同じように夢を

横目で見てできない理由をかざし、自分を説得していたのだと知った。五十三歳のあの日から、私は心の真実に向き合いたいと思い実行してきた。今、私は六十四歳。私の見ている風景は、緑の放牧場の中を馬たちが遊ぶ風景である。

今、静かに横たわる一頭の馬がいる。ターフを駆け抜けた栄光の記憶は過ぎ去り、本来の馬という自然の姿に戻り、信頼する多くの人々に寄り添われ、やすらぎの中で生きた日々。死に直面する彼に家族同然の慈悲の眼差しを注ぐ牧場のスタッフたち。

二〇〇八年三月十五日、中京競馬場のメインレースに、トップジョッキーを背にした彼の姿があった。一番人気の支持を得てゲートに入ると、観衆が固唾を呑む緊張の中でスタートが切られた。歓声と期待の中で彼、ダノンゴローは最終コーナーを回って十八頭中なんと十五番手から三百メートルに足りない直線コースで強豪馬たちをまとめて差し切り、鮮やかな重賞初制覇を果たした。引退後は熊本で種牡馬となり、その役目を終えて彼が私たちの牧場に

やってきたのは二〇二〇年五月二十三日。くまモンの面子^{シヨ}を着けて馬運車から颯爽と降りてきた。

行き場がなく処分される馬を、頭でも多く受け入れ、命が尽きるその時まで豊かに生涯を全うできるように世話をしながら、馬に触れて感じた命の尊さやその輝きを一人でも多くの人に伝えたい。この願いは私たち「認定NPO法人あしずりダディー牧場 命の会」の使命だと考えている。日本一の規模を目指してはいないが、日本で最高の養老牧場にするための努力は惜しまない。

例えば、地域とも連携しながら観光馬車や乗馬体験、馬と触れ合うことで観光振興を図っている。また、馬糞を堆肥利用してマツシユルームや有機野菜の栽培などに活用するといった、牧場から何一つ無駄を出さない、馬が生きているだけで役に立てるシステムの構築も目指している。

馬は一日に大量の糞をする。化学肥料に偏重し、養分バランスが悪化した土壌が増加している中で家畜排泄物を堆肥化して農地に還元することは、持続的な農業生産を図る上でも重要な意味がある。

特に馬糞堆肥は土壌改良効果が高く、地力を甦らせ作物が持つ本来の味や色合いなどを引き出してくれる。病害虫にも強くなれば農薬の使用量は減り、より安心安全な作物が育つ。

先にも述べたが、牧場から何一つ無駄を出さず、馬たちが生きているだけで人の役に立ち、それが牧場に還元されて馬たち自身も快適に生きられるシステムの構築、それが私たちのこれからの夢である。簡単なことではないが、このサイクルが実現できれば、新しい養老牧場のモデルになれるのではないかと考えている。そして、あしずりダディー牧場が向かうのは単なる養老施設ではなく、将来的には医療体制が整った馬専門のホスピスを創り上げることなのだ。

アメリカで生まれ、中央競馬という大きな舞台でターフを駆け巡り、熊本を経て最後の地としてあしずりダディー牧場にやってきたダノンゴーゴーは、温かい人間の愛に見守られて、静かにその生涯を終えた。特定の馬主がいなかったダノンゴーゴーだったが、たくさんさんの支援者に見守られて快適な生活が送れていたと思う。三年間の

短い時間ではあったが、私たちはあなたをけっして忘れない。



多くの人に愛されたダノンゴーゴー

一方で、そういった穏やかな余生を送ることができない馬たちが、この世にまだまだ多くいるのが現実だ。走るために生まれてきた馬であっても、彼らはそれ以外にも多くの能力を秘めており、乗馬や馬術競技だけでなく人を癒す力や観光資源としても優れた魅力を持っている。しかし、その秘められた能力を試される機会も与えられずに闇へと葬られている馬たちがいる。

それぞれの馬たちの適性にマッチした場所と役割があれば、競走馬を引退しても彼らは社会と共存できるのだ。名馬と言われた馬も、

名を残せなかった馬も、すべての馬たちに穏やかな生涯があるように願って、これからもあしずりダディー牧場は前進して行く。馬と共に生きる未来の素晴らしいシステムをつくるために。

●ダディー牧場のホームページ
<https://www.horsetrust-ashizuri.com/>



GI (2015年NHKマイルカップ) 勝利馬・クラリティスカイ (中央) もダディー牧場で暮らす仲間のひとり (隣は筆者)



牧場HP▲

みやざき えみ

認定NPO法人あしずりダディー牧場 命の会 代表理事

チェコスロバキアとの出会いが オペラ高知公演に

関川 恵子

【チェコスロバキアとの出会い】

高知で過ごした学生時代に、ブラームスの『ハンガリー舞曲全集』、ポーランド出身のショパンの『ポロネーズ』や『マズルカ』のレコードを聴きながら、漠然と東欧に興味を抱くようになりました。その後、一九八八年に会社員となり、東京での研修中に千野栄一著『プラハの古本屋』という本を手に取り、軽妙洒落な文や挿絵に心を奪われ、これがチェコスロバキアとの出会いになりました。

欧の街は、時代が止まったように、いにしへの面影を残して静かに佇んでいました。観光客もほとんどいない石畳の街を徘徊しながら、前世はこの街に住んでいたのではないかと錯覚を抱くほど、とりこになっていました。

帰国後は仕事の傍ら週末に、東京外国語大学にチェコ語学科をつくられた千野先生にチェコ語を教えていただくという、チェコスロバキア熱にとりつかれた生活が始まりました。授業後はビアホール銀座ライオンでビールを飲みながら、アイロニーに富んだだじやれも教えて下さいました。例えば、チェコスロバキアの真面目な将兵が大臣に「海軍はどうしましょう」と発言してね（海のない内陸国）、といった具合です。

【「チェコとスロバキアはどんな国」】

チェコとスロバキアは、別々に発展しますが、一七世紀以降ハプスブルク帝国の支配下に入ります。マリイ・アントワネットの母としても有名な女帝マリア・テレジアは、現在はスロバキアの首都となっているブラティスラバで戴冠式を挙げました。第一次世界大戦のち帝国は崩壊、一九一八年に独立国家チェコスロバキアが誕生します。この国は、第二次世界大戦中ナチスドイツに占領され、戦後はソ連が主導する社会主義圏に組み込まれました。一九六八年には、「プラハの春」として知られる民主化運動がソ連軍に弾圧されるなど、その歴史には幾多の苦難がありました。



スロバキアのレストランの壁飾り

一九九三年にチェコとスロバキアは平和的な協議を経て分離し、それぞれ独立国として歩むことになりました。その後、両国は互いに「一番大切な兄弟国」と呼ぶ良好で親密な関係が続いています。両国の国民性や言語はとても良く似ており、文化的な大きな違いは、チェコ人はビールを、スロバキア人はワインをよく飲むことでしょうか。音楽が盛んで、チェコはバイオリンやチェロなどの弦楽器が、スロバキアは声楽のレベールが高いことで有名です。手先の器用さには定評があり、チェコのガラス工芸（ボヘミアングラス）、スロバキアの絵本挿絵（ユニセフのクリスマスカードにも使われている）は綺麗で愛らしいです。

「スロバキア国立オペラを高知に招く」

スロバキア国立オペラは、日本の音響機器を導入したことがきっかけで、日本との縁が始まったそうです。同オペラに感銘した日本

の方からの招聘もあり、熊本県小国町からスタートした日本公演は二十五年以上続いています。私は二〇一七年ごろにオペラの方々と出会い、北海道から沖縄まで新潟市や福井市、山鹿市など地方都市を含め各地で公演や文化交流を重ねているものの、四国では公演が実現していないことを知りました。なんとか高知で公演をできないか、高知での国際交流につなげられないかと妄想するうち、友人たちが興味を抱いてくれたおかげで、今年の十月九日（月・祝）に県民文

化ホール（グリーン）で開催する運びとなりました。素人の運営で慣れないことばかりですが、一人でも多くの皆様に、スロバキア国立オペラを楽しんでいただこうと準備を進めております。

今年三月のWBC野球大会の頃、チェコと日本の野球選手の心温まる交流が大いに話題になりました。そのとき、駐日チェコ大使から「地道な文化交流が長い目で見ると平和につながる」というお話を伺いました。チェコもスロバキアも、これまで他の国から武力で弾圧された歴史を持っています。「地道な文化交流」を大切にする優しくフレンドリーな国民性は、両国に共通のものといえるでしょう。スロバキア国立オペラの日本公演が四半世紀以上続いているのは、

歌劇場のピアニストと（左は筆者）

スロバキアのオペラメンバーが日本を愛し、日本の観客との触れ合いをなにより大切にしてくたからです。それに感応し、日本各地に多くのスロバキアオペラファンが生まれました。また、オペラメンバーはスロバキア国内で公演先

の日本の都市とその文化を紹介する活動も行ってきました。こうした友好親善活動は、日本の外務大臣などから表彰されています。

日本公演は、オペラ作品の物語の筋をナレーターが日本語で解説し、名高いアリアを歌手たちが歌いつなぐというダイジェスト形式での上演、衣装と小道具で上手く雰囲気を作りだします。大がかりなオペラではない分、名曲とその歌い手がぐっと身近に感じられる、親しみやすい公演です。メンバーは国立劇場の歌手でその歌唱はトップクラス、外国からオペラ歌手を招聘する公演としてはリーズナブルな価格（前売三千円台）としておりますので、高知の皆様にも気軽にオペラのエッセンスを楽しんでいただければ幸いです。

【高知とスロバキアの文化交流】

同オペラの本拠地バンスカー・ピストリツァは中世から商業で栄え、工芸文化や歴史遺産も豊富な美しい街です。高知にも多様な伝統文化がありますから、たとえば土佐和紙がスロバキアの歴史文書の修復に使われることにならないか、などと夢想しています。

スロバキアは海のない国ですから、海に面した高知での公演を楽しむにしておられます。今回のオペラ公演が、高知とスロバキア文化交流のささやかな一ページとなることを願っています。



バンスカー・ピストリツァの広場

せきがわ けいこ

一九六五年、高知市生まれ。
高知学芸高等学校卒業。仕事や学業の傍ら、関西チェコ／スロバキア協会の理事長・副理事長として、文化交流活動に携わっている。

みんなが絶賛している本を いまさら読んでみたけれど

山中 由貴

それはずいぶん前から話題になっている本だった。

「Twitter」でもよく流れてきたし、実生活でも周囲のいろんな人から面白いと聞かし、ついには店でやっているビブリオバトル（お互いにおすすめの本を紹介しあって、どの本がいちばん読みたくなったかを競う読書会）ではじめて、参加者同士でこの本がかぶってしまった。

こんなにも騒がれる本なかなかない。なんなんだった。どれだけざわつくんだ、みんな。流れに呑みこまれるようにわたしもその本を開いた。その本とは――。

『ある行旅死亡人の物語』

（毎日新聞出版）

刊行は二〇二二年。著者は武田惇志、伊藤重衣の連名だ。ふたりは共同通信社、大阪社会部の記者で、ともに一九九〇年生まれ。彼らが魅了され追いかけてつづけたのは、ある行旅死亡人の正体であり、誰にも知られることのなかった孤独な人間の人生そのものでもある。これはその女性の生きた証を記録した、渾身のルポルタージュだ。

そもそもわたしは「行旅死亡人」ということを知らなかった。本の冒頭、こんな説明書きがあった。

「行旅死亡人とは――
こうりよしぼうにん」

病氣や行き倒れ、自殺等で亡くなり、名前や住所など身元が判明せず、引取り人不明の死者を表す法律用語。行旅病人及行旅死亡人取扱法により、死亡場所を管轄する自治体が火葬。死亡人の身体的特徴や発見時の状況、所持品などを官報に公告し、引き取り手を持つ。

きっかけは、著者のひとりである武田さんが、記事のネタ探しのために「行旅死亡人データベース」なるウェブサイトをチェックしているときに見つけた、数行の死亡記事だった。

「本籍（国籍）・住所・氏名不明、

年齢75歳ぐらい、女性、身長約133cm、中肉、右手指全て欠損、現金34,821,350円」

尼崎市のあるアパートで亡くなった人物には、気になる特徴がいくつもあった。身長の高さ、手指の欠損、三四〇〇万以上もの所持金。記者でなくともどんな事情があったのかと想像をたくましくしてしまう。

彼女の名前が「田中千津子（タナカチヅコ）」さんだということはずぐに判明した。しかし、警察も、行政に選任された弁護士が雇った探偵も、千津子さんの身元を明らかにすることはできなかった。

彼女が所持していた三四〇〇万は、遺族に遺されるべきだ。遺族がいるのなら見つけたい。そうして記者たちは女性の身元を調べはじめるのだが、つぎつぎに謎が生まれる。

たとえば彼女が「住所」と「名前」がわかっていてもかわらぬ身元不明とされたのは、保険証もなく住民票もなんらかの理由で取り消されてしまったためらしい。なぜそんなことが起きたのか、と

ふつうに考えて、警察や弁護士にも分からなかったことが、より権限の小さい記者に解明できるわけもない。それが簡単にできるのは小説の中だけだ。

しかし彼らはなんと、すべてではないにしても、田中千津子さんの過去に辿りついてしまうのだ……！

たろうか。



調査を途中でやめてしまわなかった記者たちの執念には、やがて祈りにも似た切望が混じっている。いつてしまえば記事として面

名でもなんでもない一般人の人生を、どうしてここまで追い求めるのか。それは、「田中千津子」さんという人をごく一部とはいえない「知ってしまった」からではないだろうか。

欠損した手を隠すように過ごした晩年、彼女が抱きしめていた、たなかたんくんという名のぬいぐるみ、写真の中でカメラやその向こう側の人物に向ける

笑顔……。それらは死亡記事の文字の羅列には表れない千津子さんの人柄であり、むきだ

しのなにかだ。そこに触れてしまった。そうしたら、たったひとりで亡くなってしまう彼女のこゝとを、武田さんと伊藤さんは、もつと知りたくなった。彼女を憶えている人に、彼女の話をしてもらいたくなった。それって、「悼む」ことの本質なんじゃないかなあ……なんて思ってしまう。

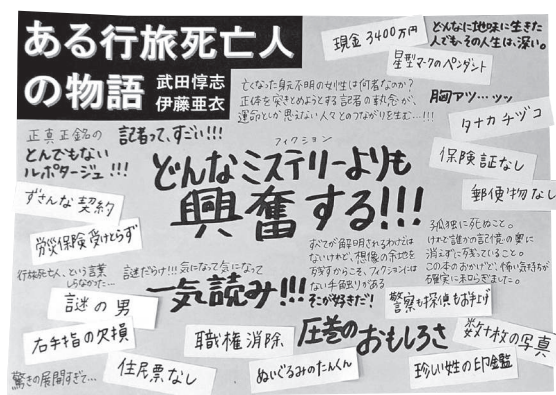
読後、湧いてきたのは、謎が解けたことへの驚嘆と、それよりもはるかに大きな、安堵感だった。

わたしが千津子さんだったらこの顛末をどう思うだろうか。そっ
としておいてくれよ、と怒るかも
しれない。だれとも深くつながり
たくなって選んだ孤独だったかも
しれない。知られたくないことが
あったかもしれない。でも、記者
たちが辿りついた人物の記憶の中
に、じぶんがちゃんと存在してい
たこと。それは、死という落下を
受け止めてくれるネットのような
ものだ。

もし孤独に死んだとしても、そのネットがあると思えば、怖くて寂しい気持ちちがすこしやわらぐ。そう想像して、息をつく。

取材を終えて、記者たちはどう

それは連名のあとがきの一行に
込められている。



やまなか ゆき
一九八〇年 高知生まれ。
TSUTAYA A中万々店の書店員
なかましんぶん編集長としてTwitter
やっています。
好きな本について喋るときだけ饒舌に
なります。

かるぽーと ご近所探訪

高知市文化振興事業団が事務所を置く「高知市文化プラザかるぽーと」その周辺の気になる企業やお店を訪ねてお話を聞き、地域の魅力の再発見や、かるぽーとを活性化していくためのヒントを探ります。

今回訪ねたのは南はりまや町の「高知アイスクリーム商工業協同組合」。ここで製造販売するのは高知名物「1×111のアイスクリン」。理事長の近澤秀歳さんにお話をうかがいました。

——組合のことについて教えてください

日本で初めてアイスクリームが製造販売されたのは明治二年、神奈川県横浜で「あいすくりん」という名前前で売っていたのが始まりだそうです。それが全国に広がり、高知でも行商が盛んになった大正十年頃に「高知アイスクリーム商工業協同組合」ができ、その組合員たちが「アイスクリン」の名称で行商をしていました。戦後は物不足で材料が手に入りにくい等の理由で組合員も衰退し二十人程に。しかし自動車が普及するとアイスクリンの売り方に驚くべき変化があったんです。車移動の旅行客などに向けて道路脇にパラソルを開いてアイスクリン

を売る人たちが急増し、これを機に組合では卸売りもスタートしました。おかげ様で今では高知名物と呼んでもらえるまでになりました。この店は昭和四十三年に建てたもので一階はアイスクリンの販売所、二階は製造工場。これが建つ以前は同じ場所にあった長屋の一角を店としていました。

——そんな歴史があったとは！アイスクリンの製造工程とは？

材料はシンプルで卵、砂糖、脱脂粉乳など。材料を混ぜ機械で冷やしながらかき混ぜると十五分くらいで材料がシャーベット状になり、さらに続けるとクリーム状に。それを容器に入れて冷凍庫で冷やし固めて出来上がりです。今の店が建つよりもずっと昔のことですが、当時は今のような製造機械は整っておらず、店前で製造作業をしていたこともあったみたい。材料を桶に入れ、桶を塩と水で冷やしながらかき回しの機械で回転させると桶の中がマイナス十五度くらいになります。それを組合員が店先に並んで機械を回していました。もちろん今は衛生法に則ったきちんとした環境で作業を行っているの、ほんと昔話なんですけどね。

——この珍しい「1×111」の名称、どんな経緯で付けたのですか？

アイスクリンは、うち以外にも製造販売している会社や店は複数あり、「1×111のアイスクリン」はうちの組合が製造販売するアイスクリンの商標。付けたのは私の前の理事長です。この

店がある南はりまや町は、以前は浦戸町という町名だったので、うちの商標のことを「浦戸のアイスクリン」って呼んでいました。でも高知市の南の方にも同じ「浦戸」の地名があり、そこにも別のアイスクリームの店があったので「どっちの浦戸？」と混乱が生じることが度々。それでうちは別の名前に変えようとなり、一度聞いたら絶対忘れないようなインパクトのあるものと先代が捻り出した名称なんです。

——お店の壁にはすごい数の注文伝票が貼られていますね！

やはり今の時期（取材時は七月中旬）が最も忙しいです。県外発送も多いし、夕涼み会やお祭りも多いので現地販売用の冷凍機材の貸し出しもあるの。こういった商売なのでコロナ禍は売上面で本当に辛かったですが、今年は売り上げも平常時の半分程度までに戻りつつあります。コロナとは別だけど、お祭りの数が少しずつ減っている印象がありますね。特に町内会主催のものなどは住人の高齢化など担い手不足といった事情もあるのかな。代わりに夏休みの始めくらいに小学校を会場にしたお祭りが、十数年くらい前から突然増え出したような気がします。

——アイスクリンから地域のお祭りの変遷が見えますね。組合さんとはご近所さんである「かるぽーと」どんなふうに使っていますか？

この周辺も様子は結構変わりましたね。この店が建つ少し前までは、こ

の近所にお寺があったし、道を挟んで向かいには食堂がありました。

業務でいうとかるぽーとで大きな学会が開催される時などにアイスクリンの発注が入ることがあります。高知名物ということで、学会の主催者が県外からの参加者にアイスクリンを振舞うんですね。嬉しいことです。地域住民としての目線だと防災面での「避難場所」とも捉えています。うちの店は築年数も長いので、地震のときの避難については常に頭にある。まずは前の公園に避難して、津波を逃れるために高い場所へとなると、やっぱりかるぽーとが思い浮かびます。いざという時に地域の住人の安全を守る大事な場所として、その役割に大きく期待していますよ。

——インタビューストも、お店には学生さんや仕事の休憩中の方などが次々とアイスクリンを買いに来ています。お忙しい中、笑顔でお話を聞かせてくださった近澤さん、本当にありがとうございました。



「アンテナ」 全身プロテクターの健太君

下尾 仁



周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がる事ができる。アンテナを高くたてて沢山の人と繋がる。

二〇二二年四月、僕の店「じんぜんじゅcafe」に真っ赤なハタターカブに乗った青年がやって来た。

彼は全身プロテクターに覆われて、まさに映画『マッドマックス』を思わせる姿。なかなか店の中に入って来ないので不思議に思っている、プロテクターを外すのにかかるの時間を要するとのことであつた。彼の乗ってきたカブを見ると、ホワイトボードのような物に「日本一周中」と書かれている。どこから来たのかと尋ねると、島根県を出発して今日で十六日目だという。彼の名は健太君。なかなかのイケメンである。

なぜこの店に来たのか聞くと、前日、種崎の千松公園でキャンプをしていると、隣にいた夫婦が「高知なら、じんぜんじゅcafe」に行けば、ひよっとしたら楽しいことがあるかもしれない」と言われ来ましたとのこと。まさにその

日、お肉屋さんから大量にいただいた上等のお肉で常連客や友人と焼肉パーティーをやることになっていたので、一緒に食べて泊まっていたきや、と誘った。文化高知No.215で書かせてもらった屋久島ヒッチハイク旅で、僕も無料で民宿に泊めてもらった時、民宿のお母さんに「これから出会う旅人に親切にしてくださいだったので、僕が彼をもてなすのは当然のことであつた。

焼肉パーティーの時も「なんであんなにごつついプロテクターを着けちゃうが？」などと健太君は皆から質問攻めに。最初は自転車から日本一周の旅に出たが、出発してすぐに車にはねられ入院したらしい。旅の期限を一年間と決めていたので、残りの日数的にも自転車の旅は無理となり、バイクの旅に変更。そして事故やケガはもう絶対にしたくないと、ガチガチのプロテクターを身につけているとのことであつた。日本一周中の健太君というスペシャルゲストの参加もあり、パーティーは盛り上がり、彼はその後三日間、店に泊まっ

ていくことになった。

店の営業中、カッオゲストハウスのオーナーがお客としてやってきたので健太君を紹介。するとオーナーから「しばらく高知におるがやったら、ゲストハウスでヘルパーをやらないか」と誘いがあり、健太君はそれを受けることに。そろそろ次の旅先に進むうかとも考えていたらしいが、結局ゲストハウスで十二日間ヘルパーをしながら無料で泊めてもらい、高知を大満喫した。楽しすぎてなかなか次の旅に進めなくなっていたようだが、夏の間に北海道を周っておかなければと、高知滞在十七日目にガチガチのプロテクターを再び身にまとい、高知を後にした。それからしばらくして新潟で美味しいう酒を見つけたのでと酒を送ってくれた。なんとも律儀な子である。そして二〇二三年四月、健太君から「旅の最後に高知に行きます」と連絡があつた。ならば、ちょうど店で面白いイベントがあるので、その日に来たらどうかと返信。イベント当日、彼はやって来た。一年ぶりに会った健太君は、短かった髪は長くなり、顔もしっかりたくましく、バイクには全国のスッカーが貼り付けられ、変わっていない事といえばガチガチのプロテクター姿くらいであつた。

面白いイベントとは、伝説のストリップ・ファイヤー・ヨーコさんのライブ。ヨーコさんは女性器から火を噴くという芸を持ち、全国を飛び回っている（もちろん大

切な部分は見えないように芸をやっておりますのでご安心ください）。ヨーコさんを見た健太君は、全国で色々なものを見てきたけれど旅の最後にすごいものが見れたと興奮していた。

そして次の日、ちょうどデハラユキノリさんのラジオ収録の出演日になっていたので、日本一周青年と一緒に連れて行っていいか尋ねると、ぜひ連れて来て！というので、健太君も出演することに。旅の話や道中のロマンスの話で盛り上がり、これまたいい思い出に。五月一日から島根で仕事が続いているというので、その前日まで僕の店に泊まっていた。全国たくさんある店の中で僕の店に来てくれ、そして旅の終わりに選んでくれてありがたう。無事に島根に着きましたという連絡もあり、これからの彼の生活にエールを送りたい。

それから三日後、入れ替わるようにカブで旅をしている青年がやって来て一泊していったが、名前も覚えていない。そんなこともある……。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

5～7月の事業から

第七十五回 高知市展

高知市を代表するアンデパンダン（公募・無審査）形式の美術展覧会「第七十五回高知市展」を五月二十七日（土）から六月十一日（日）に開催しました。七十五回を迎えた今年は、おおよそ一年に及ぶかるぽーとの改修工事が部分的に終了し、二年ぶりになるぽーとでの開催となりました。改修工事を経て、一部の展示室の壁紙やカーペットが新しく貼り替えられ、展示台も新しいものになりました。展示された力作がより一層映えるようです。

ここ数年は高知市展とその関連するイベントを縮小・中止せざるをえませんでした。今年の特段の制限を設けずに実施することができました。六月四日（日）には四年ぶりとなる、こどもアートまつり「あなたダビンチ ばくピカソ」を開催。子どもたちが日頃学校では体験できない、美術本来の面白さに触れることができるイベントです。当日は天気にも恵まれ、かるぽーと館内や建物前の広場に設けられたブースでは、たくさんの子どもたちの元気で楽しそうな声が響いていました。

展覧会最終日には、高知市展先端美術部の研究会に現代アーティストの鴻池朋子さんが登壇。さまざまなメディアで作品を発表し続けているご自身の制作活動について語っていただきました。トークイベントということもあり、参加者とコミュニケーションを取りつつ、高知市展を実際に見た感想などもお話しいただきました。

会期を通じて、「高知市展はやっぱりかるぽーとが いい」「コロナも落ち着き、やっと気軽に展覧会を楽しめるようになった」などの声も多くいただき、こういったイベントを制約なく楽しめる幸せを実感しました。コロナ禍の下での安全なイベント開催のための労力や工夫を、これからはより充実した催しとするために活かして、次回の高知市展をさらに良いものにできるよう努力していきます。

入場者数 一九九〇名

出品者集 四二九名

出品点数 五六九点



こどもアートまつり「あなたダビンチ ばくピカソ」
屋外ブース

高知市文化振興事業団

SIENA WIND ORCHESTRA 高知公演

〜ブラスの祭典 シエナ BEST コンサート〜

高知市文化プラザかるぼーと改修のため、十五カ月間休館していた大ホールの再開初日となる七月一日（土）に、高知市文化プラザかるぼーとリニユーアルオープン記念事業として「SIENA WIND ORCHESTRA」を招聘し、高知公演を開催しました。

管弦楽団の公演はこれまでもかるぼーとで主催してきました。一方、吹奏楽はアマチュアの演奏会が多いもののプロの吹奏楽団の公演は珍しいため、以前から開催を希望する声がありました。そんな中、国内のプロの吹奏楽団で人気・演奏レベル共に高いと認められている「シエナ・ウインド・オーケストラ」がリニユーアルを記念する演奏会に相応しいと思い、交渉を進めてきました。その高い人気は高知でも同様で、発売日以降チケット販売はずっと好調に推移し、コンサート一週間前には全九六七席のチケットが売り切れになりました。

コンサート前日の六月三十日（金）には、アウトリーチ活動と称して、出演者のうち五人の奏者（フルート、アルトサッ

クス、トランペット、ユーフォニアム、パーカッション）が愛宕中学校を訪問し、吹奏楽部約五十人の皆さんと交流をしました。吹奏楽コンクールの課題曲をプロの演奏者と一緒に演奏したり、パート別にアドバイスをもったり、部員の皆さんにとっては大変有意義な時間になったと思います。

コンサート当日には、愛宕中学校を含め広く県内から中高生の吹奏楽部による団体での鑑賞があり、大ホール全体の約三三％を学生さんが占めてくれました。

演奏中の心地良く上質な音楽はもちろんのことですが、指揮者の田中祐子さんが生き生きと楽しそうに指揮をする姿が印象的で、見ているこちらも楽しくなると多くのお声をいただきました。吹奏楽の人気曲を中心に構成したプログラムも功を奏したのか、アンケート集計結果の約九七％が大変良かった又は良かったと回答してくれました。

リニユーアルしたかるぼーと大ホール、新設された一階入口を初めて利用した催しでしたが、少しでも利便性が向上した

と思ってもらえると嬉しいのです。これからもかるぼーと大ホールに多くのお客様にお越しただけのようなワクワクを提供していきたいと思っています。

入場者数 九三五名



芸術の力



風俗歳時記

六月、県立美術館で画期的なイベントが行われた。「リトル・デス・クラブ」というヨーロッパのキャバレーの見世物小屋が、そつくりやってきたようなイベントである。キャバレーは、夜な夜なショーが繰り広げられ、お酒や食事をとりながら楽しむ大人の社交場である。パリのムーラン・ルージュを見た時、クオリティの高さと華やかさに圧倒された記憶がある。

今回の「リトル・デス・クラブ」のショーには、世界の舞台で活躍し高評価を得ているパフォーマーが海外から高知へ。しかも、日本では高知公演のみ。「よく、高知に招聘しましたね」と偶然隣に座った館長に話しかけたが、激しい音楽と聴衆の興奮で声はかき消されてしまった。

セクシーな言葉で男性を誘うキャバレー界の女王が歌で進行し、剣を呑む美女や自分の髪の毛で身体を吊り上げ高速回転する女性、軟体動物のようなポールダンスをする男性、観客を巻き込んだ仕掛けなど会場が盛り上がり、私がこの三十年余り見てきた美術館ホールのイベントでは最高だった。ここにアルコールがあれば、まさにキャバレーだ。素晴らしい舞台を見ても、日本人は後ろの席の人を気遣いスタンディングオペレーションには二の足を踏むが、この日は、何度か自然にスタンディングオペレーションが起こり、ここは日本？と見紛うくらいだった。

二日間にわたる三公演は満席。それもそのはずで、公演が高知限定であること、大

手旅行会社が観覧ツアーを設定したり、人気コンサートの一覧に掲載されたりと、通常とは違う企画や広報が行われ功を奏した。これだけのイベントを高知に持つて来れば、人が集まり、高知に行こうという流れができるということも認識できた。

とはいえ、何とんでもないパフォーマンスのクオリティと会場のテンションは、美術館の歴史に残るものであった。翌日もパンフレットを見ながらショーのことを思い出す。この余韻こそ本当の芸術の証ではないか。芸術の力を実感する心が豊かになる。

(立花香)



高知を撮る

第36回写真コンテスト入賞作品

お城下の昼さがり

田所 睦三

(撮影場所／3枚とも高知市追手筋2丁目)

上：夏になると冷やしあめ売りの屋台が出て、通行人が涼を求めている。

場所は現在の高知城歴史博物館入口前の歩道(昭和34年7月)。

中：古物商店等が並んでいる店先では、よく将棋に興じる光景が見られた(昭和40年7月15日)。

下：昭和30年代後半では珍しい荷馬車の通行だった。当時は貨車と呼んでいた。

樹木の後方に見える建物は、土佐女子中・高等学校の校舎(昭和38年6月15日)。



第 75 回高知市文化祭行事
かるぽーとリニューアルオープン記念

ミュージカル

空海

～HERO～



2023 年
10 月 14 日（土） 開演 18:30
10 月 15 日（日） 開演 14:00

高知市文化プラザ
かるぽーと 大ホール

前売 3,000 円
当日 3,500 円

©前田実津

自分さがしは終われ。自分はがしを始めよ。

伊藤キム ソロダンス 「ダミーズ」

日時 2023年9月15日(金)18:30開場19:00開演
会場 高知市文化プラザかるぽーと小ホール
料金 一般前売り2,000円(当日2,500円) 高校生以下前売り1,000円(当日1,500円)
お問い合わせ 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

大阪

M君は大学一年生のときの寮仲間。けっきょく最終学年もアパートが同じになった。私は家賃一万円程度の、二階の五畳半一間にいた。風呂なし、共同洗面、汲み取りトイレ。昭和の末に、故郷高知にもないような関東の古アパート。M君は一階の二間ある広い部屋にいた。元寮生や所属のサッカー部員がいつも「全員集合」していて、M君はこてこての関西弁でホスト役となった。

M君の実家は大阪の鉄工所。私が卒業三年目で私的な同窓会を高知発で始めたとき、嬉々として大阪から来高してくれた。以後同窓会一の常連となる。

各地に天災が起こると、M君は決まって被災地の同窓を応援した。神戸の地震のとき東灘区で被災した同窓を、皆に声をかけて見事にアシストした。

M君が自ら病氣のことを話したのも同窓会だった。その後も相変わらずの快活さで、私がメールでぐちゃぐちゃすると、「うじうじ言うところとまた高知襲撃するぞー」などと励まされた。

神戸の同窓から連絡が入り、M君が余命なく、今一時帰宅しているの、順番に同窓が電話して短時間で話を、と言った。M君の声を聞いたあとと泣いた。

葬儀には仕事で行けなかった。神戸の同窓が一年目の愚かさに来いと言ったので、思い切って大阪へ飛んだ。初体験の大阪の愉快で騒がしい街なかには、M君そのものだと思った。

神戸の同窓がサプライズで、愚か会の参加者をなんばグランド花月へ案内した。生のお笑いの舞台はすばらしかった。ほんに励まされ元気になる。笑いと涙は同じとはこういうことか。会場中の観客が笑顔のM君に見えた。

(三)

今号の表紙

置き去りの夏

池上 響

日本の夏のレトロな風景を描きました。行けなかった甲子園、あつという間に溶けるアイス、結局家から出なかった夏休み。そんな置き去りになった過去を想像して、このイラストを描きました。

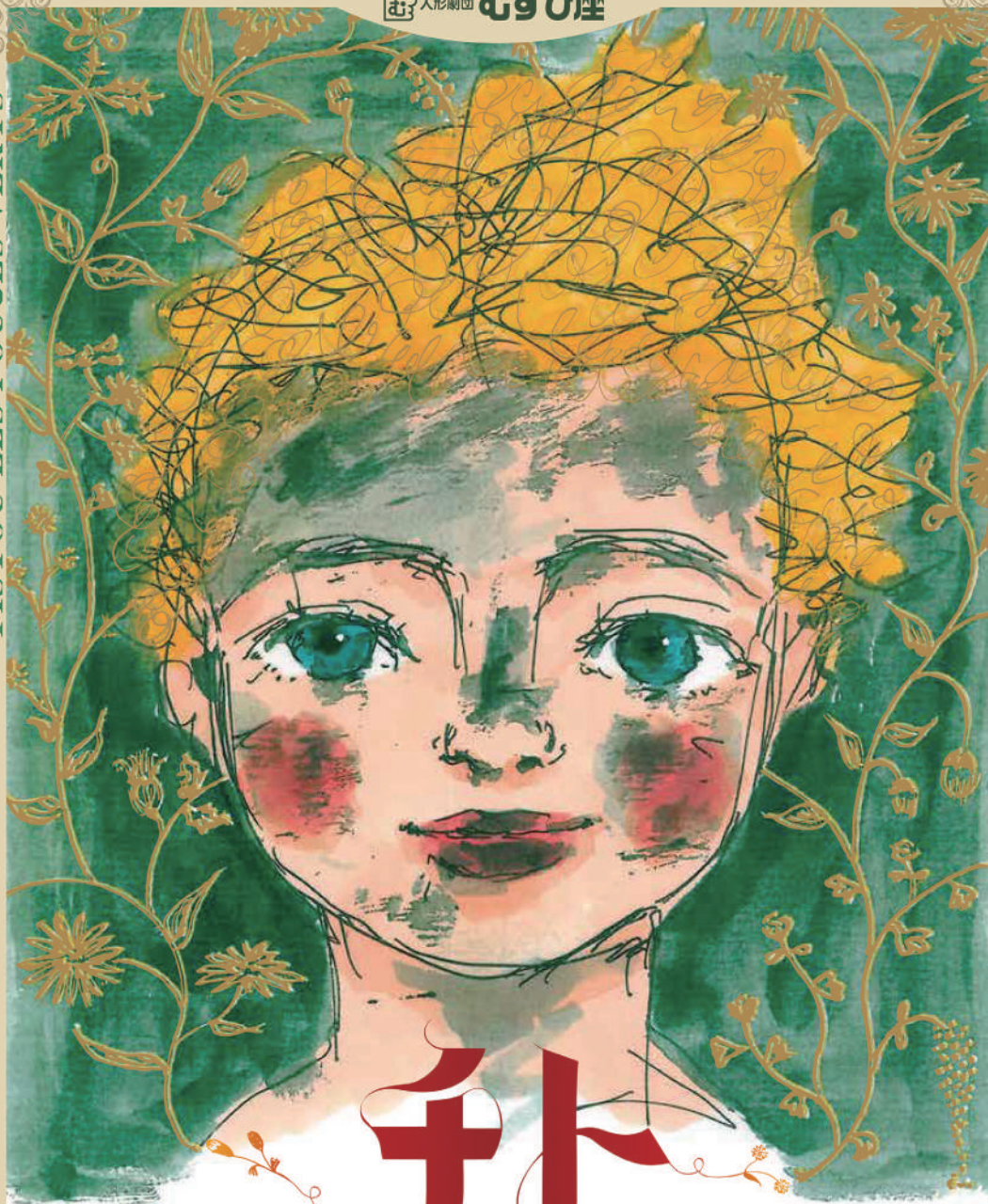
(いけがみ ひびき／
龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年)



人形劇団

むすび座

TISTOU LES POUCE VERTS



みどりのゆびをもつ少年

2023年9月22日(金)18:30開場 19:00開演
高知市文化プラザかるぽーと大ホール

主催:公益財団法人高知市文化振興事業団/NPO法人高知市こども劇場/さんざんテレビ/人形劇団むすび座